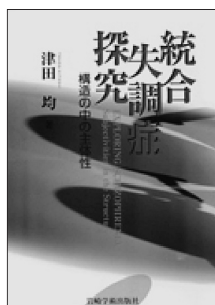


■ 書 評



統合失調症探求
—構造の中の主体性

津田 均 著
岩崎学術出版社 2011年5月
256頁, 定価 4,200円

近年、統合失調症の神経生物学的研究は、比較的高い再現性の高いデータを提供しつつある。再現性こそが自然科学研究の拠り所であり、輝かしい成果である。その結果、統合失調症の概念は神経変性疾患と同次元の医学モデルの範疇に整然と納まるかのように見える。その理由の一つに、1980年発表のDSM-III以降、統合失調症の概念が狭小化したことが功を奏しているように思われる。とはいえ、生物学的研究の進展は、病の新たな理解や治療に結びつく病因や病態の解明を必ずしも意味しない。むしろ、ミクロな水準における病因から見ると、統合失調症と双極性障害、あるいは、自閉症スペクトラム障害をはじめとする発達障害との境界は不明瞭であることがいよいよ明らかになりつつある。つまり、統合失調症を統合失調症たらしめる特異的病因は否として見出されず、脳構造の発達段階における非特異的な要因の集積によって発病が準備されるというありふれた仮説がより確かなものとなったに過ぎない。かくも、統合失調症は生物学的には他の精神障害群とさほど変わらぬ相貌の病であったのであろうか。

本来、精神病理学の論考の書評にもかかわらず、以上のような連想が浮かんだのは、本書の冒頭、「主体性のパトスの精神病理学へ向けて」と題する「序章」における次の文章に触発されたためである。著者の危惧に、立場は違えど、評者も感ずるところが大いにあるのである。

「筆者の持つ危惧は、現在の精神医学が病さえ見えなくなっているのではないかという危惧である。質問紙で評価できる部分、今日の生理学、薬理学の枠

内で理解できる部分のみを切り取ることに自らを限定しようとする傾向は現在、特に研究面であまりに優勢である。しかし、そのようにして切り取られた中からは、統合失調症という病を病たらしめているものはすでに抜け落ちていくかもしれないのである」

以下、著者は統合失調症の病理に潜む能動的な主体性について詳察を展開する。臨床の現場では、それは医療や家族、社会などによって構成される様々な制度との相互作用において立ち現れる。著者は、従来、了解不能とされ、精神病的と断じられてきた患者の不審な挙動にさえ、それを彼らの主体性の発動であり、自己回復の志向であり、また、制度への拮抗であり、あるいは交渉であろうと見る。評者が、冒頭に記したような生物学的精神医学の到達点を物足りなく感じ、著者の警句に共感するのも、昨今の諸学説がこうしたダイナミックな視点を欠いているように感じるからである。

著者の語り口はよどみなく、丁寧で疎漏がない。とはいえ、一連の論文は、1990年代の半ばから著者が専門誌に発表してきた論考であるので、一般の臨床医が気安く斜め読みできるような類ではない。姿勢を正して、かなり真剣に読み込み、思索することが求められる。幸い、各論文の冒頭に新たに書き加えられた解説のお陰で、それぞれに論じられる問題点が今日の精神病理学の大系において、どのように位置付けられるかを理解することが容易になる。現象学的・人間学的精神病理学からラカン派の構造主義まで、広大な領域を俯瞰できる資質とキャリアを持った著者ならでの力量であろう。なかでも、末尾の「哲学と精神医学」の章は力作である。著者は、昨今隆盛の神経心理学に果たして精神病理学が包摂されるか否かを熱く論じている。著者が今はなき東大分院神経科学派の系譜につながる人であることが思い合わされる。恩師、故・安永浩氏は、60年代のわが国の精神病理学界にファントム空間論なる神経心理学的な発想を披露し、皆を瞠目させたのであった。

一般身体医学とさほど変わらぬ相貌を呈しはじめた近頃の精神医学に違和感を感じる臨床医に是非本書を勧めたい。評者にとっては、最近ではなかなか得がたい豊饒な知的陶醉を味わうひと時であった。

(黒木俊秀)